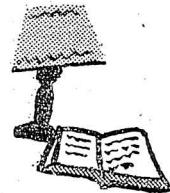


# 心理学講座より

「心理学講座」第11回配本附録

東京都神田局區内神保町2の24 電車通り 株式會社 中山書店



## 心理学は

おとろえぬか

波多野完治

現在、心理学は非常にさかんである。空前にさかんである、といつてもよい。だが、この盛行を「絶後」であらしめないようにしなくてはならない。

それは心理学をやっているものの職場の点からいっても大切であるばかりでなく、世の中にとつても大切なことである。

心理学は世の中の考え方影響され、その研究テーマを選択したり、その結論をゆがめたりすることがあるが、逆にまた世の中は、心理学の考え方をうけ入れざるをえない。ことに心理学が非常にさかんになれば、そうなる。ところで、心理学の考え方は、その本性上、いつでも、ヒューマニズティックなものだ。だから、日本のように、封建的な、非人道的な要素が多くのこつていて、ヒューマニズムのよわい社会では、心理学をさかんにしておくことは、その一事だけでも、いく分かヒューマニズムをつよめるのに役立つに相違ない。

日本では今までに、現在とほどんどおなじくらい心理学のさかんなときがあったらしい。それは明治の末年から大正のはじめにかけてで、そのころには、いわゆる「精神科学」は心理学を基礎としなければならないとされ、どんな人も、一応精神科学、社会科學、人文科學を志すものは、心理学を勉強したものだ、という。

ところが、それが次第々々に心理学の旗色がわるくなり、わたくしが大学を卒業するころには、心理学で飯をくえるところは、高等学校（旧制）と大学

日本応用心理学会大会  
研究発表報告

## 応用心理学論文集

右ができます。部数に限りがありますので、御希望のお方は、なるべくお早目に、売価五〇〇円・送料三〇円をそえて発売所の中山書店にお申込みください。

日本応用心理学会

だけになっていた。わたしたちの卒業した昭和三年には、就職率は非常にわるく、わたしや牛島義友氏などは、家庭教師をしてやつと露命をつないだ有様だった。そうして、この時期は、陸軍や海軍が心理出の人

人を大量に要求するようになるまでづくのである。

一時さかんであったものが、なぜおとろえたか、という原因をつかんでおくことは大切なことだろうとおもう。

大正初年までの心理学はなぜおとろえたのだろうか。古老の話を総合すると、これにはほぼ三つの原因があるようにおもわれ第一は、学説の問題である。このころの心理学として代表的なのは、ヴァントの心理学とアメリカの機能主義なのだが、この二つともに、精神科学の基礎たるにふさわしいものでなかった。で、本格的に心理学を勉強すればする程、精神科学者たちが、心理学をきらいになった、ということがあるようである。心理学以外の人たちばかりではない。心理学の専門学者のうちにも、心理学に愛憎をつかむ人がたくさん出た。

第二は、当時の心理学が、主として「解剖」の科学で、人間の心理にはたらきかけられて、これを変更する現実の科学でなかつた

## 心理学講座

### || 第十二回配本内容 ||

児童心理学 東北大教授 松本人寿

教育学部長

松本人寿

金寿

生長曲線 文部省大教授 小保内虎夫

文部省大教授 博士

小保内虎夫

西丸憲一

知覚の異常 洪谷憲一

洪谷憲一

四方

睡眠 医学博士 西丸憲一

医学博士

西丸憲一

四方

精神衛生 植村康平

東大助教授 植村康平

泰介

泰介

グループダイナミックス 松村康平

助教水女子大教授 松村康平

泰介

泰介

経営心理学における諸問題 水原泰介

助教水女子大教授 水原泰介

泰介

泰介

世論 東大助教授 池内一

東大助教授 池内一

泰介

泰介

経営心理学における諸問題 池内一

日本油脂伊吹山太郎

泰介

泰介

桑原桑原。どうかそのような時代のまま

せんように。(筆者は、お茶の水女子大教授 文学博士)

租税の心理 薩摩審議所 大原一三

大原一三

泰介

泰介

# 教育研究における

## 一つの感懷

大浦

猛

なものでなければならないこと

つくといふのだ。

しかも、数多くの教育研究は、現実社会に対し責任のある実践をしなければならない。学校制度の全体から責任のある解答をいつでももとめられているのである。そのうえそのままかたは、およそ研究とそしてその関係にもついて最もものを考えみると、いうまでもなく、教師と生徒との関係が開される心理的過程がうかびあがつててくる。ところが、これすら、きわめて複雑な構造をもっている。教師のがわからみれば、目的・内容(教材)・方法などの意識がからみあっており、それらが生徒のがわにおける学習目標・学習内容・学習流動のとらえた・感じたと交錯し、しかも相互に独特な自己意識(劣等感や自信)や他者意識(児童観や教師観)をともなつていて、教育現象の総合的解釈ということはじつに困難な作業となる。

このことは、教育研究が非常にむずかしいということの主要原因の一つである。

教育心理学に関する諸研究がいばらの道をあゆまざるをえない重要な原因の一つも、ここにあるのである。あるいはまた、多くの教育心理学的研究がダイナミックな教育・学習過程へのアプローチを欠き、文化や慣習や社会階層などの現実条件を抽象して、スタイルックな知能検査や評価の尺度や要素的な発達の公式や素朴な条件反射に専念するという傾向もでてくるのである。教育心理学にして然り、その他の教育研究の前に立ちはかかる道のけわしさをおおよそ見当が

教育という現象はじつに複雑な構造をもつてゐる。それは最後的には、社会心理現象」として成立するのであるけれども、物的・外的な要素が土台になつたり、用具になつたりしなければ具体化しない。つまり、行政的・財政的要素を土台にし、施設や教具が「ながだち」にならなければ、はつきりした形であらわれるすべがないわけである。教育費・校舎・運動場・教室・図書・教具・学用品など、一まとまりの物的条件は、もともと「社会心理現象としての教育」をささえる外的条件にはほかならないけれども、しかしそれは不可欠の条件であり、媒介であるために、いつでも具体的な教育現象にしつかりとつきまとつていて教育現象の内的要素であるかのような印象をあたえる。

だから、教育現象の評価はきわめてむづかしい。六・三制や新教育といふものの功罪を論ずるときも、特定の教師と生徒との心理的相互作用關係だけをみていたのでは、「まと」をはずることになりやすい。つまり、教育についての認識や評価は結合的

にも「複合的な」現象であるが、実践としてみると、あまりにも「価値的な」行為なのである。だから「どの条件のもとでは、どんな結果があらわれるか」だけでなく、「どうすることが、どんな理由でよいのか」ということもはつきりさせなければならない。これが不幸にして、教育研究者の肩によせられている社会的職能というのだ。その点では、われわれよりもより多く「価値」の問題や「主体的実践」というテーマを専門にしている倫理学者や哲学者の社会的職能は、われわれよりもはるかに香氣でゆるやかだといつてよい。

## わが国における

### 双生児研究の現状

上 武 正 二

生活」を実施した。

わたって「双生児集團

わが国における、双生児研究の先駆者として、小保内虎夫教授をあげることができ。教授は、昭和二年に「双生児による心的遺伝の研究」、昭和六年には「双生児の Mirror-image と左利きとの関係」を発表されている。前者は、小学児童の中から一三組の双生児を選定して、身体計測はもあらん、各種の心理学的実験、知能検査、情意検査を実施した研究結果であり、後者は一卵性双生児に特有とされる鏡映像現象についての実験研究の報告である。また、その附録では、「一卵性二卵性仮説に関する問題」と「わが国における双生児出生率」が論ぜられている。

その後、昭和一二年に公けにされた駒井卓、福岡五郎両氏の共同研究は、大阪、堺兩市における双生児についての身体的、精神的両面の組織的研究である。これにつづいて東大医学部脳研究室のめざましい研究活動が始まった。

脳研究室では早くから双生児の研究に従事していったが、ベルリンのゴットシャルト教授の「双生児合宿所」の開設に刺激されて、前後三回（昭和一七年、一八年、二三年）にわたって「双生児集團

- 研究がその主な研究課題である。  
いま、参考までに、昭和二八年度の研究題目を示すと次のようである。
- 1、一卵二精子性双生児の存否に関する研究  
松永 英二
  - 2、卵膜所見による卵性診断の再検討  
松永 英二
  - 3、類似所見による卵性診断の再検討  
井上 英二
  - 4、双生児の血清学的体質に関する研究  
上野 正吉
  - 5、指紋および掌紋  
上野 正吉
  - 6、双生児の生体人類学的研究  
鈴木 尚
  - 7、双生児の歯の人類学的研究  
森田恒太郎
  - 8、声の生理学的機能  
近藤 四郎
  - 9、双生児の形態ならびに運動機能の生長発達および双生児法による体育測定法の検討  
岩下 富蔵
  - 10、双生児の内科学的研究  
冲中 重雄
  - 11、双生児の自律神経機能およびこれと性格、環境との関係に関する研究  
葛谷 信貞
  - 12、人格の層次構造の研究  
上武 正二
  - 13、双生児における学習、学業成績およびしつけに関する研究  
岩下 富蔵
  - 14、性格の発達史的研究  
岡田 敏藏

15、双生児の personality および life  
space の研究 高木 真一

16、人格行動上の問題を呈する双生児の研究 高木 四郎

17、双生児による犯罪者の精神医学的研究 高木 四郎

18、双生児法による精神薄弱遺伝の研究 西谷 三四郎

19、精神神經疾患の双生児研究 内村 祐之

内村 祐之

右のように、「双生児研究班」はわが国における唯一の双生児総合研究機関として発足し、この三年間にいちじるしい成果をあげることができた。しかし、他面においては研究課題が多方面にわたり、それだけにまた、多くの疑問と問題とを感じている。その解決にはなかなかの日時を必要とするから、この種の研究機関は将来できるだけ長く存続することが望ましい。

また、仙台、金沢、広島などでも心理学による双生児研究がおこなわれているが、これらがいっそう連絡を密にして、組織的に研究をおこなつたならば、さらに目醒ましい成果があげられるであろう。筆者はこれを衷心から希望するのである。(二八年一二月一三日) (東京教育大教授)

そこでどうかすると、「そそかしいもとめ」に応じて「そつかしい答」を危くさせられそうになることがある。街の医者以上に(ひきあいに出して失礼であるが)おおざっぱな処方箋を書くおそれがある。

二〇世紀は心理の世紀といつてもよいかかもしれない。ともかく現代の社会科学は多かれ少なかれ、人間の科学を通さないでは、

その具体的な眞実にふれ得なくなっている。そして心理学とはすぐれた意味で人間の科學である。

私たち教育の領域にたずさわっているものはいわば、人間にとり組んでいる。教育の科學が広義の社会科學であるべきことは今日ではいわば、人間にとり組んでいる。教育の科學が広義の社会科學で

重要な貢献をしてきたし、またしてくれることを私たちは期待する。それは教育を、

科学的に高めるためである。

日本応用心理学会の「心理学講座」は、

そういう点で私たちによい助力を与えてくれるものである。私たちには、自分の問題に応じて、その講座の講師

たまに相談を持ちかけねばよい。幸い、現在の

心理学会の各分野の人

は次第に受け入れられるようになってきた。そして心理学、この人間の科學も方法的に

は自然科学に近似しながらそれが社会科學に属すように考えられてきたのは最近のことである。教育にとって心理学はますます

複合的な事実についてあきらかにされたことと、価値的な実践への方向づけとの「みぞ」が大きくひらくおそれがある。危い、危い。おもえば、一種のヒューマニズムにひかれて大変な事攻をえらんだものである。

(教育大助教授)

## 自由で有効な 学習のため

東大教授 勝田守一

人間科学 小保内虎夫著  
（教育大教授 文學博士） 定価三〇〇円  
〔全訂新版〕

中華書店

# 読者のページ



斯界の諸学究の筆によつて、現代心理学の動向を知りえたことは大きな歓びです。特に巻末の文献が大変役に立つております。

山口県宇部市中字部 医師 高松 茂

国語学を研究しているのですが、言語研究に心理学が不可欠であることはいうまであります。しかし一般の国語学者は内省心理学程度しか理解せず、科学としての国語学からメンタリズムはむしろ排そうとする傾向が強かつたと思つています。その意味でも本講座はたりない部分を補つてくれ、非常に有意義だと思います。

滋賀県草津町

國語学者 塚本鉄雄

初学者のわれわれに広い視野を与えてくれる点では、好個の書と思います。私の研究室では全員が購読しています。なお外国文献を読む手引として、終回には原語による索引をつけていただきたい。

名古屋市東区添地町二三  
藤田英治

## 編集部より

応用方面、たとえばデーターの研究なども少し詳しく説明したものが欲しいと思います。現代アメリカの労務管理等の紹介があればよいと思つています。

宮城県登米郡佐沼町 高校教諭 中津川誠也

読者の皆様新年おめでとうございます。新らしい年を迎えて、皆様の意氣軒昂たるおりから、第十一回配本をお手もとにおとどけ申し上げます。

全巻完成の晩には、必ずや本講座がスタンダードとして不朽の価値をなえ、皆様の一生の伴侶として、生活の指針として、机上を飾るにふさわしい豊かなものとなることを確く信じてうたがいません。

現代心理学界の動向について、また若い学者の研究にわたつても知らせていただきたいと思います。

長野県南佐久郡野沢町 教員 田代直三郎

(編集部註・心理学会の動向、研究報告につきましては、日本応用心理学会編集による「応用心理学論文集」を御参考にされようお勧め致します)。

心理判定を必要とする仕事に従事しているのですが、関係諸学の知識が広く盛られていて教えられるところの多いを喜びとしています。学生のみならず現場のものにも有効な参考書であると思ひます。

都城市姫城町 児童相談所 神田足水

かえりみすれば、昨年春刊行以来今日まで、第十一回配本と予定どおり順調に発行できましたのは、ひとえに諸先生方のご勞苦と、読者の皆様の絶大なご支援の賜物であります。編集部一同心から感謝いたしております。

全巻完成まであと数ヶ月、

編集部はなお一層の努力をかたむけます。諸先生方のご労作にむづい、読者の皆様のご要望にこたえるべく決意いたしております。なにとぞ客年倍するご支援を賜りますようお願い申上しげます。

当初、全十二巻を十二回の配本の計画で発足しました本講座も、その後進行途上におきまして、皆様方から寄せられましたご希望、ご感想等に基き、新たな項目を加えましたことと、かつてはご執筆諸先生方の原稿枚数の増加等により、配本回数で二回分の増加となり、最後の詳細な総索引とともに全部で十五回となり、今春中に完成つまります。

ここに謹んでご報告申し上げますとともに、わが国最初の本格的刊行としての本講座完成のため、ご諒承くださいまして、いつもそのご支援のほどをひとえにご懇願申し上げます。